

いじめ問題への対応の要諦 ⑧

「挨拶プラス一言運動」＋「いつでも誰にでも相談週間」

国が毎年実施している「問題行動調査（以下、「調査」という。）の結果によれば、いじめ問題の相談相手の大半は学級担任（全認知件数中、小学校は84%、中学校は89%）です。しかしながら、「担任の先生には相談しにくい」と考える子どもが問題を抱え込んでしまい、結果的に重大事態に至るケースがあります。



令和3年度の本市の調査結果では、学級担任以外の教職員に相談したとの回答率は、小学校は3%、中学校は6%に過ぎません。ちなみに、保護者や家族に相談したとの回答率は小学校12%、中学校は0%です。

子どもの多くは、いじめ問題を親に相談できずにいます。学級担任にも相談できなければ問題は認知されず、深刻化する恐れもあります。

教師が学年・学級の枠組みを超えて子どもの心に響く言葉がけを行い、子どもが相談しやすい環境をつくること、学級担任はもとより、全ての教職員が、いつでもどこでも子どもの話に耳を傾け、考えを引き出す対話を行うことは、いじめ問題の早期発見・早期対応を可能にします。

実行する勇気

ソニー共同創業者 盛田昭夫

アイデアの良い人は世の中にたくさんいるが、良いと思ったアイデアを実行する勇気のある人は少ない。

出典：「賢人たちに学ぶ 自分を超越する言葉」本田季伸著（かんき出版）

※ 優れたアイデアの実効は、新しい価値の創造につながります。